

十勝毎日新聞 十勝農業記事ハイライト

技術開発

早生の小豆 密植で収量増

2019年3月9日

十勝圏農業新技術セミナー（道総研十勝農業試験場主催）が2月28日、幕別町百年記念ホールで開かれた。豆類の早生品種活用や播種（はしゅ）期の工夫で収量や品質を高める方法が発表され、最近の気象変化にも対応できる可能性が示された。

◆金時、播種遅らせ色流れ減少

十勝圏農業新技術セミナー



新たな品種や栽培方法が
示されたセミナー

十勝農試研究部
小豆菜豆グループ
の堀内優貴氏は小
豆に関し、生育期
間が短い早生（わ
せ）品種を密植す
る効果について発
表。収量が増える
のに加え、生育が
早まるため、地域

によって播種の遅れに対応できるとした。

十勝、オホーツク管内で最も作付けされている「きたろまん」について、標準の1.5倍となる10アール当たり約2万5000本の密度で栽培した結果を紹介。成熟期が1日早まり、収量が9%高まると話した。

ただ密植は、倒伏が増える可能性があるという指摘。地力の高い畑では草丈が伸びて倒伏しやすくなるため、栽植密度はあまり高めない方がよいとした。

播種は通常5月下旬に行うが、十勝中央部は気温が高く、天候不良による作業遅れがあっても、6月上旬まで

なら間に合うと説明。その場合、密植で成熟を早めることや、生育期間の短い「ちはやひめ」の栽培を勧めた。

生産環境グループの小谷野茂和氏は、播種を遅らせることで色流れのリスクを低減する金時の一栽培方法を示した。

金時は通常、後作となる秋まき小麦の播種に間に合わせるため、9月上・中旬に成熟するよう栽培されることが多い。気象変化で9月中旬の雨が増えていることを指摘し、「9月下旬はリスクが少ない」と述べた。

下旬に成熟させるには「大正金時」は6月下旬、「福勝」は6月15日ぐらいに播種を遅らせるとよいとした。収量や品質は、標準的な種まきに比べ、百粒重が10グラム前後増え、色流れの割合も低下すると示した。

小麦以外の作物を後作にする場合は、成熟期を遅らせることが可能で、「地域全体で成熟期を分散することで高品質な十勝ブランドを維持してほしい」と呼び掛けた。



堀内優貴氏



小谷野茂和氏

道産和牛 対米輸出へ 畜産公社十勝 道内初の認定

2019年6月1日

北海道畜産公社（本社札幌、岡本安司社長）の十勝工場（帯広市西24北2）が、食肉の米国輸出が可能な施設として、道内では初めて厚生労働省の認定を受けた。米国への輸出には最高水準の衛生管理が求められるため、北海道・十勝の牛肉を輸出する場合、本州の認定施設を経由していた。十勝産をはじめとする道内産和牛の世界的な輸出拡大にもつながると期待される。

◆最高水準の衛生管理

5月31日付で国内14施設目として十勝工場の第3工場が認定を受けた。準備が整い次第、7月にも米国に輸出する。

米国輸出に対応しているのは全国のと畜施設のうち1割弱ほどで、道内の肉牛は岩手県内の施設で処理し、輸出していた。岩手に運ぶコストが掛かるほか、地元産の肉牛の処理が優先されることから、生産者や農業団体の間では道内で輸出できるインフラ整備の要望が高まって